

# 多文化共生事業事例集

年度

R4

団体名

大崎町

助成金名：多文化共生のまちづくり促進事業

事業費総額 1,199 千円

事業名

情報発信による多文化共生社会の実現に向けた基盤づくりと交流拠点の活性化事業

概要

外国人・国際的なルーツを持つ人々に取材を行い、多文化共生に資する取材記事を作成。町の広報紙への掲載や役場庁舎窓口における展示会を通じて、広く発信した。また、展示会の開催に併せ、取材対象者や関係者を招いての交流会を行い、多文化共生の推進に関わる人物の発掘と連携のきっかけをつくった。

## 事業のポイント

◇2030年の定住外国人数目標値を1,000人としており、外国人が本町を選んでもらえるような環境整備や多文化共生施策の必要性が高まっている。事業活動をコミュニティスペース「マルおおさき」を拠点として実施し、多文化共生拠点としての活性化を図る。また本町における国際的なルーツを持つ人々のネットワークづくりの機会となるように事業を行う。

## 事業の背景・目的

◇外国人が不自由なく暮らしていくためのハード、ソフト両面における基盤整備と同時に、地域に住む日本人の多文化共生に対する意識の醸成、外国人との相互理解の促進を図ることが、外国人だけでなく、日本人にとっても住みよい町となり、さらなる地域の国際化を進めていくことができると考えている。

## 事業の詳細

### (1) 在住外国人実態調査:

町内に定住する外国人、国際的なルーツを持つ方々の中から、出身国、在留資格、職業などの多様性、住民生活への関わり方などを考慮した上で、対象者を選び、合計10回、18名にヒアリングと取材を行った。

### (2) 多文化共生情報発信:

読み手が、在住外国人と異文化の存在に親しみを感じられる内容となるように、対象者の人生の物語や人物像が伝わるエピソードに着目し、文章と併せて肖像写真も掲載した。

#### ① 町広報紙に掲載

広報紙の令和5年2月号に多文化共生特集記事「世界に友達を」として掲載。

#### ② 多文化共生展示会「世界に友達を」

広報紙の内容に付け加えて文章と写真を展示。場所はより多くの町民に見てもらうために大崎町役場本庁舎ロビーにて開催した。

#### ③ 多文化共生展示「世界に友達を」オープニングイベント

ヒアリングの対象者や関係者を招待し、展示会場にてオープニングイベントとして交流会を実施した。

#### ④ デジタルPR冊子「世界に友達を」の制作（A4×17ページ）

②の展示の内容をもとにデジタルPR冊子を制作。



展示会の様子



## 事業実施における工夫点・事業の成果等

広報紙に掲載することで、町内の多くの世帯への配布や町内各施設、コンビニ等に配置しており、より多くの住民に読んでもらえるようにした。併せて行った展示会も役場本庁舎の玄関ロビーで開催することで、多くの住民の目に触れるようにした。

町として初めて「多文化共生」という考え方を全面的に紹介し、「まずは、あいさつから」という分かりやすい結論を示すことで、住民へのメッセージ性を高め、地域に住む日本人と外国人の日常に良い変化をもたらす情報を発信することができたと考えている。このことは今後、町でさまざまな多文化共生の取組を進めていくために必要な住民意識の基礎となると考えており、さらには今回作成したデジタル PR 冊子は町内外において、多文化共生への理解の浸透のために活用できるツールとして、継続的に活用していく予定である。

ヒアリング、取材、交流イベントを通じて、本町における国際的なルーツを持つ人々のネットワークの構築と多文化共生に関わる活動に意欲のある人材を発掘できた。

長期定住者、多文化共生を目指して活動したい地域の教育従事者、短期定住者、マルおおさき運営協同組合、国際協力に従事する町職員、国際交流に関わる地域おこし協力隊、鹿児島大学、日本語教師らが連携し協議しながら、次年度以降、引き続き多文化共生社会の構築を目指したまちづくりに向けて協力していく土壌ができた。



デジタル PR 冊子  
「世界に友達を」

## 今後の課題・（コロナ禍の状況を踏まえた）将来に向けての展望等

本町においては、引き続き、多文化共生拠点の構築、地域に住む日本人と外国人との交流等による相互理解促進に取り組んでいく。また本事業と併せて実施した大崎町多文化共生環境安全連絡会議や外国人雇用企業へのヒアリング等で明らかになった日本語教室へのニーズ、防災対策への不安、ごみ分別に関する課題についても対応していく。さらに、本事業において構築された多文化共生のための活動に関わる人々のネットワークを活用し、総合的に多文化共生のまちづくりに取り組んでいく。



取材時の写真

## 事業担当者のふりかえり

大崎町には総人口に占める外国人数の割合が県内でも高く、生活する中で外国人の方が増えてきているという認識は広がっていると感じていました。しかし、なぜ大崎にきたのか？どういった思いで生活しているのか？というような人物像や背景を知る機会はほとんどありませんでした。

「まずは、あいさつから」というメッセージは外国人、日本人関係なく大切なことであり、相互理解を促進するきっかけとしての情報発信ができたと感じています。

今回の事業において、インタビューや取材に協力いただいた方々、その他関係者同士のネットワークを構築できたことが、非常に重要であり、今後の多文化共生社会の実現に繋がる取組になったと考えています。